



二月興行

交樂座人形繪巻稿

段の橋

交樂座



當 日 二 月 興 行

大日本帝國政府
 大藏省
 公債局
 發行

油
 價
 表

真
 行
 表

中
 國
 表

大
 正
 表

小
 正
 表

三
 月
 表

四
 月
 表

五
 月
 表

六
 月
 表

七
 月
 表

八
 月
 表

九
 月
 表

十
 月
 表

三
 味
 線

大
 正
 表

大
 正
 表

● 人形上りながる



郷土藝術の極彩色

文樂座人形淨瑠璃

前 國性爺合戰

道行の段
(三時三十分の豫定)

樓門の段
(四時の豫定)

獅子ヶ城の段
(四時五十分の豫定)

御食事時間 幕間 二十分間の豫定

勸進帳
(六時二十五分の豫定)

御食事時間 幕間 二十分間の豫定

攝州合邦辻
(七時四十分の豫定)

合邦内の段

御休憩時間 幕間 十五分間の豫定

檀浦兜軍記

琴責の段

(九時三十分の豫定)
打出十時二十分の豫定



人形芝居について

◇人形芝居發達の事

◇文樂座なり立の事

◇人形頭説明の事

今から見ては簡單なものに相違なかつたけれども、後世人形と呼ぶ種類の物は、日本でも遠い昔からあつたのであります。其れは傀儡子に

始まつたもので、傀儡子の名は已に十餘年前に『和名妙』や『新猿樂記』『雲州往來』に見えて居り、傀儡子の輪廓は、王朝末期の文章博士大江匡房の『傀儡子記』に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧の民で、男は狩を表業に、木偶や土偶を舞はせたご御座います。其當時に、四三ご云ふのが傀儡を舞はせた事が『散木奇歌集』に見えて居ります。手遣ひの幼稚な物には相違なかつたので、多少の糸が附いて居たかも知れない、ご云ふ想像は出来ない事もありません。其後傀儡子は、門附か辻立で命脈を維いで居たらしく御座います。浄土宗の起るに至つ

て、傀儡子の大方は浄土宗の行者になり、特技の人形を舞はして勸化の効を顯はしたもので、所謂首掛け芝居の形式ではあつたが、佛菩薩の本縁や、寺社の縁起、即ち謂ふ所の本地物を語る説經と結んで、人形舞はしは自然と諸國に擴がる様になりました。之れが人形舞はしの擡頭する遠因だつたと思はれます。而して、其内には例の三味線が渡來して來るし又お粗末ながら淨瑠璃といふものも出來た、即ち京都の目貫屋と云へるが西の宮から人形舞しを誘ひ出して、茲に始めて三味線に上した淨瑠璃、又それに合せて舞す人形と此三者が綜合される事に成りました

たのが、慶長年中、即ち徳川の始
頃です。忽ちにして京では四條五
條の如き或は江戸の堺町さか葺屋
町さか、櫓も立つて此人形芝居も繁
昌したのであります。順序として當
然此頃には最う人形の類も増しては
ゐたのですが、然し舞臺などは固ま
り無く其人形で首があるばかり、
遣ひ手の手が人形の着物の裾から袖
口へ出されて舞されたもので、大阪
の石井飛彈櫓も始て其手足の工夫も
したものです。由來此櫓號なる
ものは人形師の所有なりしを後に淨
瑠璃太夫の勢強くこれを専らにす
るに至つたこの事。さて竹田のから
くり人形が出来たり、野呂松のの

る、人形が出来たり、次郎三郎が
おやま、人形を使つたり、殊に彼
の元祿時代になるに大阪へ義太夫が
現はれて竹本座をはじめ、又近松翁
が現はれて此義太夫節のために人形
芝居に最も適切な名淨瑠璃を澤山書
き卸し、しかも其人形遣ひとして
は辰松八郎兵衛さ云ふ名人が出て、
今の出遣ひの如きも此人によつて始
まつたさ云ふのが、始めは此人形を
下の幕の上の顔隠し幕の間から出し
て遣つてゐたので、畢竟人形の動
くに随つて自然遣ひ手の身体も動く
之が見好くないから黒幕の蔭に黒頭
巾して遣つてゐたものを、愈々今度
八郎兵衛が袴を着て手摺を離れ無

量の手妻を遣ふに其全身少しも亂る
事もないさとい評判を取つたので
あります。加之他方また豊竹座の出
來るあり、即ち西と東と同じ大阪の
地に於て太夫三味線、作者から人形
遣ひさ全く競争的に繁昌を來した
のですから、從つて其進歩發達は眼
覺しいものがあり、道具建から人形
衣裳總ては美びしく立派やかな靈
し、舞臺大幕の上に小幕を引くやら
山簾を本山の張ぬきにするやら、
太夫も出語りするやら、例へば人
形にしてから先づ眼も動き、指先
が動き、享保の末には竹本座「大内
鑑」の與勘平彌勘平が腹をふくらま
し、元文になるに豊竹座「武烈天皇

儀」の佐手彦の眉を動かさしはじめると、非常に發達を遂たのであります。即ち言を換れば當時名人の遣ひ手も輩出した次第で、中にも吉田文三郎の如きは享保始め竹本座の「國性爺後日合戦」に初出勤、錦舎の出遣ひに片手の暗業を示して以來、いふものは實に此人形について工夫を凝らしたもので、其一例を擧ぐればある「夏祭」の人形に始て帷子衣裳を着せるさか、或は其遣つた一寸女房おたつに桔梗の帷子黒繻子の前帶淺黄の綿帽子を着けさせた如き、今なほ歌舞伎で真似てる所事實此時代さいふものは線盛んを極めて歌舞伎はあれど無いも同然、帷は林立

して其最負は寝まじい有様であつた云ひます。江戸まで矢張之と同じく、慶長の昔薩摩澤雲が淡路の人形舞し、此人形芝居を始め、各派の淨瑠璃芝居が誠に繁昌してゐたのです。享保に一端大阪の義太夫芝居が入つて來てから云ふものは又漸次に其勢力範圍を成つてしまひ御案内の同様に歌舞伎狂言なごば全く此人形の眞似のみ演てゐたものであります。前云ふ辰松も三郎兵衛も共に江戸へ來て其妙技を揮つた事があるのです。兎も角も此人形芝居の全盛は凡そ百年間、寶曆から明和以後になる。漸次本場大阪でも亦江戸の方でも其勢力は歌舞伎に奪はれ、

結局あの大坂の新興北堀江座すらも大した事には成らなかつた。見るべきであります。然し此間に在つても人形は其一個に所謂黒坊四五人も掛かり、或は出遣ひ二人も掛かる事、其他太夫の引拔早替などのケレン早業は愈々進歩を見せたので、而も操芝居としては前述の如く、其後は盛んならぬ各座の起伏消長が今日に至れり。云ふ次第で、それも今や獨り當大阪の文樂座が現存するのみで他には語るべきが無いのであります。さて當文樂座は百餘年の昔淡路の人植村文樂軒が大坂高津區に櫓を起したのに始まり、一時中絶しましたのを十七年終に東區淡路町五丁目

御靈神社境内へ移つたのであります。以來發展を來たしてゐましたが大正十五年晩秋不慮の災禍に喪失し其後本城を見物中このほど四ツ橋に新築いたしました、而も日本にこれ一座ぎり云ふのは心細い次第で、彼の能樂と同様日本の古典的舞臺藝術として、之を永遠に保存すべき、怖らくは國民的義務もあらうかご考へます次第で御座るゐます。序でながら此人形は大體・首・胴・手及び足の四部に分ける事が出来、而も其首あるひは頭につきましては勿論大まかではあるが大體の役々が定まつて居ります。例へばげんびし（檢非

違使）と云ふのは、竹本座の『用明天皇職人鑑』の時檢非違使の役に使つたから此名が出たので其後は廣く世話時代共に用ひられて、例へば『寺子屋』の源藏、『妻八』の八郎兵衛、或は『千本櫻』の銀平、『陣屋』の盛綱のごとき、なほ之の眼目なるはあの盲兵助などに使ひます。今では實盛なども之です。然し南水漫遊などを見るに別になつて居るやうであります。それから矢張南水漫遊には素盞鳴さありますのが今の所謂孔明と呼ぶ頭で由良の助などにも使ふ事があること云ひます。兎もあれ菅相奩や『薄雪』の兵衛、あるひは『紙治』の孫右衛門などを勤める首で、矢張竹本

座へ近松が書いた『日本振袖始』から出た人形だと申します。それから若男といふのは源太さと呼んでゐるごか聞きますが持役としては『朝顔日記』の駒澤に『太十』の重次郎、その眼隅へ張を入れ其眉を引きつめるご『阿古屋』の重忠に成つたりし他種類の若男は敦盛の役などをすると云ひます。又所謂おやまの中にはおむすご云つて之は勿論娘の事で『野崎』のお染『壺坂』のお里『妹背山』のお三輪などを勤めるのもあります、南水漫遊に傾城さあるのも多分のご同じものかご考へます。斯んな具合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形品目が擧げられて居るのであります。



仙壇女道行の段

シテ 豊竹 駒太夫
 ワキ (竹本 貴鳳太夫)
 ツ 豊竹 綾太夫
 レ 竹本 陸路太夫
 竹本 播路太夫
 鶴澤 歌助
 野澤 友造
 鶴澤 八助
 鶴澤 友若
 友作

前 國性爺合戦

仙壇女道行の段

樓門の段

獅子ヶ城の段

この床本が書卸されたのは正徳五年十一月一日初日の竹本座で、作者は近松門左衛門。その時の名題は『母は日本國性爺合戦』でありまして、これより先にこの國性爺を材としたものに信濃椽の正本『國仙野手柄日記』があります。元禄十三年頃錦文流の作とあります。この狂言は未曾有の大當りをこつて、三年越十七ヶ月間打通して興行した名作であります

その後享保二年二月十五日初日で國性爺後日合戦が、仍且近松翁の作で上場されました。この時人形遣の名手吉田文三郎が始めて出演し、錦舎の人形を片手にて出遣大好評を博しました。この時より大幕の上に小幕を引くことが始まりました。これか水引幕の始であります。『樓門の段』は三段目の口で竹本内匠理太夫が初演『獅子ヶ城の段』は三段目の切で初演は竹本政太夫であります。全五段の内この獅子ヶ城は最も有名で歌舞伎でも九代目團十郎の當り藝となつたものです。

樓門の段

明朝思宗皇帝の時、右將軍李踏天が

鶴澤	鶴澤	鶴澤	鶴澤	鶴澤	豊澤
友衛門	友衛門	友衛門	友衛門	友衛門	猿糸
叶太郎	叶太郎	叶太郎	叶太郎	叶太郎	叶太郎

人
形

一住吉大海童子	吉田	扇太郎
一仙壇女吉田	吉田	文作
一小むつ吉田	吉田	文之助

韃靼王に内通して其の兵を引入れて
 王城を陥れ、ために思宗王は薨せ
 られたので、大司馬將軍吳三桂とい
 ふ者が王の幼い太子を奉じて九仙山
 に隠れました。王妹仙壇女は船で
 この難を遁れ流れ、て日本の平戸
 浦に漂着し舊臣であつた鄭芝龍の子
 和藤内に救はれました。この國難の
 起る前鄭芝龍は日本に亡命して老一
 官ご名を改めて日本の女を妻として
 一子和藤内を生けました。王妹仙
 壇女を救つた老一官は始めて祖國の
 難を知つて、妻と和藤内とを伴ひ本
 國に渡り、芝龍時代前妻との間に生
 けた娘錦祥女を訪ねて、その夫甘輝
 を味方にするさいふ前段です。

「仁ある君も用なき臣は養ふことあ
 たはず。慈ある父も益なき子は愛す
 る能はず、日本唐土様々に道の巷は
 別るれど、迷ばで急ぐ誠の道、石壁
 山の麓にて、親子三人廻り合ひ、我
 輩さばかり聞き及ぶ、五常軍甘輝が
 館、獅子ヶ城にぞ着きにける。……
 老一官一行三人連れて樓門にさしか
 くるが要害堅固で入れず錦祥女は義
 ご恩愛の柵にかゝるさいふ苦しい立
 場になります。夫甘輝を味方にする
 その吉左右の報せば川に流す白粉は
 上首尾もし紅なれば不首尾と思へそ
 自ら縛られた和藤内の母親を連れて
 門内に入ります。

樓門の段

獅子ヶ城の段

竹本 鍛太夫

豊澤 新左衛門

人形

一和藤内の母 吉田 文五郎

一老一官 桐竹 門造

一和藤内 吉田 玉松

一錦祥女 桐竹 紋十郎

この『國性爺』はその書卸し當時の正徳、享保頃にはまだ健在で臺灣によつて清朝と對抗して争つた書殘されてゐます。明朝の遺臣鄭芝龍（老一官）ごその子鄭成功（和藤内）のこゝを際物として扱つたもので、鄭芝龍は肥前平戸に亡命して土地の武士田川氏の女を娶つて一子を擧げた、それが鄭成功で狂言の和藤内であります。その後父子は故國に歸り明帝を擁し今の臺灣に據つて清朝に反旗を翻し、その時、徳川幕府に援兵を乞ふて来た、紀州の頼宣卿等は熱心に出兵論を執つたが幕議は容れず不可と決したと傳へられてゐま

す。院本はこの事件を支那本土に持込んで近松翁独自の流麗な文章で書かれてあります。この『國性爺』は大正十五年五月一日初日で御墨文樂座に出て以來の演物で實に久し振りの狂言であります津太夫も今度の上演で唯二度目の語物だけに皆様にもお珍らしき聴きものと思はれます。この獅子ヶ城の段は先代呂太夫が得意としたものでその合三味線の鶴澤勝鳳に就て津太夫は修得したもので今度の友次郎も初めの線でありませう。この段の内容はご申しますと自ら縛られて城内に入つた和藤内の母は、錦祥女と共に甘輝を説きました。甘輝も義理のある甘輝は承諾しないので錦祥女は

獅子ヶ城の段

切 竹本津太夫

鶴澤友次郎

人形

一 五常軍甘輝 吉田 榮三

一 錦祥女 桐竹 紋十郎

一 和藤内 吉田 玉松

一 和藤内の母 吉田 文五郎

門外に待たした老一官と和藤内へのかれての合圖であるため錦祥女は自害して、紅を流すので、さてこそ和藤内は勢込んで城中に亂入して追ります。和藤内の母も娘の後を追つて自害するので、遠の甘輝も和藤内に味方して明の再興を約し和藤内は國性爺延平王に封ぜらるゝさいふ筋で全曲中最も有名な場面であります。全曲近松翁の麗文だけにその詞章のあや等思はず引入れられて往きます。

同じ鑑の聲にぞつうじ入らざりし錦祥女は孝行深く……：こ國を異へた義理の親子の恩愛の情誼を陳べ、M なんぞ日本の女子見てか、目も鼻も變らぬが可笑しい髪の結び様、變つた衣裳の縫ひやう若い女子もあれであらふ、裾も襷もばらく……：支那の女が日本の女の服飾を驚異の眼で珍らしく見る條を面白く叙し、更に錦祥女が夫甘輝を親兄弟の忠誠に與させよふこ自害して説き伏せる條など眼に熱い露を宿さずにあられませぬ、勇士と烈婦の働きに、骨肉の恩愛さては義理人情の粹をつくしたる近松翁傑作中の傑作で當文樂座人形淨瑠璃の粹であります。



中 勧進帳

勸進帳

武藏坊辨慶 富樫左衛門 源義三郎 伊勢次郎 駿河八郎 片岡八郎 常陸坊 梶下佐忠太 番 卒

役 豊竹和泉太夫 豊竹相生太夫 豊竹つげめ太夫 豊竹源路太夫 豊竹富太夫 竹本長子太夫 竹本文太夫 豊竹駒尾太夫 竹本隅榮太夫 竹本津磨太夫 竹本文字榮太夫 竹本佐久太夫 竹本宮太夫

替日 豊竹和泉太夫 豊竹相生太夫 豊竹つげめ太夫 豊竹源路太夫 豊竹富太夫 竹本長子太夫 竹本文太夫 豊竹駒尾太夫 竹本隅榮太夫 竹本津磨太夫 竹本文字榮太夫 竹本佐久太夫 竹本宮太夫

浄曲の勸進帳は遠く貞享三年に宇治加賀椽も西の橋初代竹本義太夫と名聲を争つた際「凱陣八島」を出しその中にこの勸進帳を出したことがあります、其後番場忠太紅梅館「磔胎内拵」にもありますが今度上場される「勸進帳」は明治二十八年書卸したのが博労町彦六座跡の稻荷座で初代團平の作曲であります。大体に歌舞伎の勸進帳と謡曲の安宅を合せたもので、以来團平師の秘曲として来たもので、御靈文樂座の烏有に歸する前年辨慶を古軼太夫、

富樫を源太夫、義經を當時の靜太夫（今の太隅太夫）で糸は友次郎で辨慶の人形は文三でありました。書卸し當時は富樫を三代目太隅太夫、辨慶を生嶋太夫、義經を當時の伊達太夫（今の土佐太夫）で糸は團平師でその時、道八がツレ引で出たので今度もその時の團平師のまゝを上場いたします。特筆すべきは辨慶延年舞を振付を今度特に舞踊界の新人模茂都陸平氏を煩はして按舞人形の型をつけて戴いた次第であります。全段中に見せ場聴き場の問答の詞章の序を書抜きますと、

「正廣膝を進ませて、いかに先達そ

人形

鶴澤道八
野澤勝市
竹澤團六
豊澤廣太郎
豊澤猿太郎
鶴澤寛市
鶴澤清二郎

一、武藏坊辨慶 吉田榮三
一、源義經 桐竹紋十郎
一、常陸坊 桐竹政龜
一、梶下佐忠太 吉田玉幸
一、伊勢三郎 桐竹紋太郎
一、片岡八郎 吉田玉市
一、駿河次郎 吉田光之助
一、富樫左衛門 吉田玉治郎

も世に佛徒の姿種々有る中に山伏達の異形の姿はいかなる仔細に候ぞそれ修験の法云ふは胎藏金剛兩部の旨を修し險山惡所を踏開き世に害をなす惡獸毒蛇を退治して難行苦行の功を積み、惡靈亡魂を得脱成佛させ天下泰平の祈禱を修す表は強魔の相をあらはし惡鬼外道を降伏さす、是神佛の兩部にして百八のいら高珠數に佛跡の利益をあらはす。ムイシテ又袈裟を身にまきひ佛徒の姿に有りなむら頭に頂く兜巾はいかに。お、則頭巾は五智の寶冠にして武士の兜に等しく十二因縁のひだをすへて是を頂く。ムイシテ篠懸の因縁は

是そ九會曼荼羅を表はす。黒き脚絆は。胎藏界の黒色なり。八ツ目の草鞋は。八葉の蓮花を踏にかたごる。シテ山伏の出立は則其身を不動明王の尊體にかたごるなり。出入る息は、あうんの二字。ムイ扱又寺僧は錫杖を携ゆるに山伏徴檢の金剛杖に五体をかたむる謂はれば何ぞ。事も愚かや金剛杖は天竺檀特仙の神人阿羅々仙の持給ひし靈杖にて胎金兩部の功德をこめたり纏摩未だ瞿曇沙彌ご申せし時、阿羅々仙に給仕して難行の功を積み御名も照善比丘ご改めて此金剛杖を授かり玉ふ。かゝる靈杖なればこそ我祖先役の小角是を用ひて山野を経歴し玉ふなり……………



合邦住家の段

中 竹本鏡太夫

鶴澤網右衛門

次 攝州合邦辻

合邦内の段

この『攝州合邦辻』は安永二年二月北堀江座の正本として菅專助、若竹笛朝が合作したるもので、元祿七年竹本義太夫正本『弱法師』の改作であります。上下二段より成り、上の段は住吉で玉手御前が、俊徳丸に毒酒を進める所、高安館の偽勅使、俊徳丸國遠、繪旨取戻して下の段は天王寺西門閻魔王建立滑稽勸化、合邦内の段であります。書卸し當時合

邦内の段の切は豊竹此大夫が語つてゐます。只今では古軼太夫の合邦さへば普く知られてゐるほど古軼太夫の得意の語りものであります。永らく上場を禁ぜられてゐましたので名作も世に出なかつたのです。その禁も解かれて大正十四年十月の御靈文樂座で古軼太夫が初演しました。最近では昭和三年四月道頓堀辨天座で上演して絶大の好評を博しました。越路太夫もまた十八番としてゐた名作であります。内容を申上げますと、合邦の娘お辻は氏無くして玉の輿、藤原通俊といふ公卿の奥方玉手御前と出世した。通俊には先妻

切
豊竹古鞆太夫

鶴
澤
清
六

腹の嫡子俊徳丸と外戚腹の次郎丸といふ二人の息がある。次郎丸は壺井平馬等と心を合せて俊徳丸をなきものにして家督を奪はんと計ります。玉手御前は義理ある子の俊徳丸に身も世もあらぬ無態の横戀慕をします朝香姫といふ美しい許嫁もあるので嫉妬して俊徳丸に毒酒をすゝめて業病にかゝらせます。俊徳丸は家出して天王寺の非人小屋に籠つたが朝香姫を訪れてゆき手を携へて合邦の家へ行くに其處で計らずも玉手御前と落ち合ひます。合邦は娘の不倫の戀を怒つて我も及にかけますと玉手は

始めて眞實の底意をうち明けます。

俊徳丸に戀慕を見せたは計略で悪者等の爲に一命も危い俊徳丸を助けやう爲であつたのです。

卑しい女から玉の輿に乗せられた夫への報恩と繼子への義理立まであります。玉手御前は寅の年月揃つた女で、その臟腑の生血を絞つて飲ませるに俊徳丸の業病も忽ち治るさいふ人々に喰灸された狂言であります。院本の一節をしるしますと、

Mしんくたる夜の道、戀の道には暗かられ共、氣は鳥羽玉の玉手御前、俊徳丸の御行方、尋ねかれつゝ、人目をも、忍び兼ねたる煩冠り、包みかくせし親里も、今は心の頼みに

人形

一、親合邦 吉田榮三

て、馴れし古郷の門の口、立ち寄る後
 より入平む、御兩所の御行衛、爰こ
 は聞けど奥方の、姿見るより様子も
 こ、戸脇にあつき藪疊、身を潜めて
 そ窺ひ居る。かくさばしらで玉手御
 前、ひわれに洩るゝ細き聲、詞かゝ
 様、か、様と、呼ぶは慥に娘の聲、
 詞ヤアわりやまだ死なぬか、殺さり
 やせぬかこ、立上りしむ心付き、振
 り返り見る女房の方、鉦に紛れて聞
 えぬは、これ幸ひと素知らぬ顔、詞
 か、様、か、様爰明けてこ、叩く戸
 の音聞き咎め詞コレ合邦殿、今こな
 様何とぞ云ふてか。イヤ何共云やせ
 ぬ、そりや空耳であるぞいの。イヤ、
 ヤ、空耳かは知られ共、ちらりこ聞
 えた娘の聲、ハテ合點の行かぬこ立
 上る。詞さう仰有るはかゝ様か、ち
 やつこ明けてくださんせ、辻でござ
 んす戻りましたと、聞いて恠り、詞
 ヤア／＼戻つたとは夢ではないか、
 まめであつたか嬉しやと、かけ出る
 裾を取つて引さめ、ヤイ／＼／＼狼
 狽者、詞肌はふれてもふれいでも、
 我子に不義をしかけた畜生、侍の
 身で高安殿が、助けおかしやる様な
 ければ、何の今迄存命で、うか／＼
 爰へ何にしにこうぞい、ア、隠すま
 り顯はるゝはなし、親はないと云は
 してもある事知つて、娘が手から度

一、合邦女房 吉田 玉七

一、玉手御前 吉田 文五郎

一、奴入平 桐竹 門造

々の合力金、二人の命を養ふたは、コリヤコレ皆高安殿の御厚恩、其夫の目をかすめ、畜生の心さげた娘、譬へ無事で戻つたさて、門ばたも踏まされうか、元來娘は斬られて死んだ。が今もの言つたが娘なれや、夫こそ幽霊、そなた氣味が悪うはないか、肉縁の深い程、死人になれば怖いもの、コレ必らず門の戸明けまいぞと、云ふに女房はイヤ〜、幽霊は愚か、狐狸の化けたのでも一度見たい娘も顔、もしや恐ろしいものであつて、目を廻して死んだら仕合せ、いさしい可愛い子を先立て、生きて業をさらそうより、一ト

目見たいと振切るを、猶引こめて、ハテ扱て悪い合點、詞、狐狸か幽霊なればまだしも、もし誠の娘なら高安殿へ義理の言譯、以前は刀を差した役、親の手にかけて殺さにやならぬ、それがいやさに留めるのぢや泣かれど親の慈悲心を、聞く子や妻は内さ外、顔と顔さは隔たれど、心の隔泣寄りの、眞身の誠ぞ哀れなる娘は涙押し拭ひ、門の戸口に口を寄せ、さゝ様の腹立、お憎しきは御尤これには段々言譯あれど、人目を忍ぶ此身のうへ、マア爰明けて下さんせと、泣く〜願へば母親は、詞アレ聞いてか合邦殿、言譯があるさいの

一、俊徳丸 吉田市松

マ、聞いてやつて下さんせ、ハテ娘
 と思へば義理もかける、幽霊を内へ
 入れるに、誰に遠慮もあるまいぞへ
 ア、いかさまのう、此世をはなれた
 者ならだ、世間を憚る事もないかい
 そんなら早う呼込んで茶漬でも手向
 てやりや、ア、可愛や立寄る所もな
 し、幽霊も嗚ぞひたるからうと、身
 を背けるは泣く百倍、母は悦び門の
 口、戸しやおそしと開く間も、おな
 つかしや。オ、なつかしやと縋る娘
 の顔形、前後見つ肌に入手を入れても
 矢張りほんの娘、嬉しやまめでゐた
 かいのう。然さは知らいで逆様事、
 あたいまくしい百萬遍、甲ひした

夜に無事な顔、ひよつと夢ではある
 まいかさ、抱きしめく嬉し泣き父
 もほごふる娘の顔、見たさに思はず
 立寄れど、以前の詞と世の義理を、
 思へばちやつと飛退いて、手持悪い
 ぞいぢらしき、母は漸う心を鎮め、
 詞世間の噂にはの、そなたは、アノ
 俊徳様とやらに戀をして、館を抜け
 て出やつたの、イヤ不義ぢやの悪
 ふ云へど、そなたに限り、よもやく
 さう云ふ事はあるまいの、コリヤア
 ノ嘘であらう。オ、くオ、く……
 オ、嘘かくくさ著持つてくゝめる様
 な母の慈悲………といふ親子の情
 味の溢れた名曲で御座ぬます。

一、淺香姫 吉田扇太郎



切 壇浦兜軍記

琴責の段

琴責の段

阿古屋 竹本土佐太夫

重 忠 竹本大隅太夫

榛 澤 竹本越名太夫

この床本は享保十七年九月九日初日にて竹本座に上場せるもので文耕堂と長谷川千四の合作であります。近松の『出世景清』の改作であるは申す迄もないところで、第三段の口『琴責』が最も優れてゐるので歌舞伎の世界にも移入されました。即ち景清は頼朝を討つて平家の仇を報ぜん。肝臓を碎くに對して箕尾谷四郎とその縁者は景清を捕へて鏡曳の恥辱を雪がんと苦心します。景清は義を重んじて箕尾谷に捕はれて、入牢し

ます。機を見て牢を破り日向勾當となつて西國へ下ります。その景清は遊君阿古屋と深い馴染を重ねてゐるので源氏方では阿古屋を白州へ呼出して景清の行方を詮索します。阿古屋は知らぬの一點張りに毎日拷問をかけられます。岩永左衛門の荒々しい調方に對し、秩父庄司重忠は躬つた調べて榛澤六郎と共に遊君であるからには三曲の糸の調べによつて阿古屋の心底を見極めよふと、三味線胡弓、琴を奏でさせますが、一糸亂れぬ調べに疑惑は暗れるといふ抒情的詩と繪畫美の溢れた名狂言であります。その正本の序曲を記しますと、

岩

永

竹本文字太夫

ツレ

野澤 吉兵衛
野澤 勝平

琴 鶴澤友平

胡弓 野澤吉左

人形

一、秩父庄司重忠 桐竹政龜

M 覺の脛短しと雖もこれをつかは
憂ひなん、鶴の脛長しといへどもこ
れを断たは悲みなん、民を制する事
此理に等し。然れば治まる九重に、
猶も非常をいましめの、水上清き堀
川御所、當時鎌倉の嚴命に従ひ、秩
父の庄司次郎重忠、禁裡守護の代官
として、兼ては民の公事裁判、私の
はからひなく道にくもらぬ十寸鏡智
仁の勇士とかがやけり。同席に相並
ぶ岩永左衛門致連、南都東大寺の建
立より直様都に押留り、重忠の助役
と號し悪七兵衛景清が、在家をさが
す邪智妄奸、表は忠義に見せかけて
已か意恨を挟む……斯る折から秩父

の郎黨様澤六郎成清、遊君阿古屋を
拷問の、時刻も限る未の刻、六波羅
より立歸り、御門に下す囚人駕籠を
上げて引出す、妾は伊達のうちかけ
や、いましめの綱引かへて、縫の模
様の糸結び、小褌取る手もまなれ
ど、胸はほごけぬ思ひの色、かたち
は派手に氣は憎れ、筒に挿したる牡
丹花の、水上かぬる風情なり。……
即ち其内容はと申ますと、平家に孤
忠をつくす景清は叔父大日坊を奈良
坂で殺して悪七兵衛と呼ばれます。
頼朝が上洛の途中根の井館に立ち寄
るを景清は仇せんぞ大工になつて入
り込みます。同じく左官に身を獲し

一、岩永左衛門 吉田玉松

て入り込んだ箕尾谷に組み伏せられて、鎌倉の土牢に入れられます。い

つとなく景清は牢を破つて逃げたの

一、傾城阿古屋 吉田文五郎

でその行衛詮議のため景清が馴染の遊君阿古屋は堀川御所の白洲に召出

されます。名判官秩父庄司重忠は阿

二、榛澤六郎 吉田玉幸

古屋に三味線、琴、胡弓の三曲を奏

でさせますが、糸の調は整然として

一、水 奴吉田文作

一絲も亂れませぬのでその心に邪心

のない證據、阿古屋は景清の行方知

一、水 奴吉田玉市

らぬばこれに現れたりと許します

この曲の筋はこうなつてゐますが、

一、水 奴吉田光之助

この阿古屋の出である床本として、

寶曆十四年の『契情阿古屋松』明和

一、水 奴吉田市松

元年の『娘景清八島日記』等があり

ます。阿古屋といへば土佐太夫の語

りものさして極め附けられた十八番

ものですが、明治二十三年に岡山の

千歳座で初代團平師匠の糸で稽古を

したのも、後になつて自家の藝城こ

した次第で、その時の掛合、重忠は

大隅太夫、岩永は故源太夫、榛澤は

七五三太夫でありました、三段目の

は、いでありますがこれ位文章のい

ゝものは珍らしいものです。その文

章は論語から多く出てゐます。元來

この阿古屋三曲は琴、三味線の音色

は三味線一挺で皆演じたさうです。

團平は明治廿四年高松の巡業地で始

めて琴胡弓鳴物を入れて演じたもの

で其以來今日上場されてゐる型にな

つたものであります。